

九世紀の転換－長安街東社会の形成－

妹尾達彦

九世紀～十三世紀にかけての時期が、現代社会の直接の源流をつくったことは、多くの先学が論じてきた。アフロ・ユーラシア大陸におけるキリスト教圏やイスラーム教圏、仏教圏等の普遍宗教圏の形成は、この時期のもつ同時代性と画期性をよく示している。

本報告は、ユーラシア大陸東部の都城の一つ長安を事例にとりあげ、長安の街東の街衢の細部に迷い込むことで、時代の転換が促した都城の変容を明らかにしたい。特に、九世紀の長安街東中部の空間に、科挙受験生や科挙出身の官僚たちが集住し、庶民社会と支配階層の間を媒介しながら、宋以後の新たな知識人社会の原型をつくっていくことを指摘したい。

安史の乱後の九世紀の長安では、八世紀前半の玄宗期に始まった都城空間の変容が一層加速し、都市城内の機能的な地域分化が顕著となっていく。太極宮から大明宮への政治中枢の移転は、大明宮前の空間の再編を促し、東市とその西北部が長安の都市核となり、その南側の高台に科挙進士科出身の官僚の多くが居住するようになった。城内の空間は階層別棲み分けが進み、城外の土地利用も城内の地域分化に応じて機能的な役割分担が進み、城内の機能分化に対応して墓域や別荘、行楽地などの郊外社会がつくられていく。

注目すべきは、東市以南の街東中部における文人たちの活動である。多くが科挙受験生や進士科出身者である文人たちは、街東中部に集まり住むことで文人同士の交流を活発化し、科挙合格者階層という新しい時代の人間関係を構築する。彼らは、盛唐詩をふまえて中唐詩を創造し、仏教の教養をもちながら儒教の革新運動に参加し、漢魏の古典文化の復興を先導した。同時に、才子佳人小説や武侠小説を創作することで、男らしさと女らしさの社会的な性別を新たにつくろうとしたのである。本報告では、新たな文化の台頭が、長安街東中部社会という特定の居住空間を舞台に生まれることの意味を論じてみたい。